

こたえ いっすんぼうし
一寸法師いっすんぼうし
一寸法師

(日本の昔話)

昔、子どものいないおじいさんとおばあさんが、神様^{ねが}にお願いをして、男の子をさずかりました。

ところが、その子は、いつまでたっても、指ほどの大きさにしかなりません。二人は、その子を「一寸法師^{いっすんぼうし}」とよびました。

ある日、一寸法師^{いっすんぼうし}は、都へ出てりっぱなさむらいになると決め、おわんの舟^{ふね}にのって川を下りました。

都で、一寸法師^{いっすんぼうし}はお姫様^{ひめ}のおともをすることになりました。とちゅうで鬼^{おに}があらわれ、一寸法師^{いっすんぼうし}をのみこみました。一寸法師^{いっすんぼうし}は、鬼^{おに}のおなかの中で、はりの刀をふり回しました。鬼^{おに}はたまらず、

① それをはき出してにげていきました。

鬼^{おに}が落としていった打ち出のこづちをふると、一寸法師^{いっすんぼうし}の体は、ぐんぐん大きくなりました。

① いっすんぼうし
一寸法師は、何にのって川を下りましたか。

おわんの舟^{ふね}

② ①「それ」とは、何のことですか。

いっすんぼうし

③ 鬼^{おに}がにげていったのは、どうしてですか。

おなかの中で、一寸法師^{いっすんぼうし}がはりの刀をふり回したから。

④ 打ち出のこづちをふると、どうなりましたか。

ア お金が出てきた。

イ 体が大きくなった。

ウ 鬼^{おに}がもどってきた。

⑤ いっすんぼうし
一寸法師は、どんな人物だと言えますか。

ア 体は小さいが、勇気^{ゆうき}がある。

イ 体が大きく、力が強い。

ウ おくびようで、すぐににげる。